

社会福祉学部 2024 年度ティーチングポートフォリオ

氏名	職位
佐藤順子	教授
大場義貴	教授
野田由佳里	教授
川向雅弘	教授
福田俊子	教授
佐々木正和	教授
落合克能	准教授
泉谷朋子	准教授
篠崎良勝	准教授
井川淳史	准教授
鈴木文子	准教授
仲義之	准教授
水野尚美	助教

氏名 佐藤 順子
職位 教授

1. 教育の責任（科目責任者として担当する科目）

科目名	受講者数	科目名	受講者数
総合演習Ⅱ（社・佐藤）	3	社会福祉学概論Ⅰ	60
ソーシャルワーク演習Ⅴ	45	地域福祉論Ⅰ	51
キリスト教社会福祉	11	総合演習Ⅰ（社・佐藤）	4
総合演習Ⅲ（社・佐藤）	3	社会福祉学概論Ⅱ	49
地域福祉論Ⅱ	47	社会の理解Ⅰ	11

2. 理念

地域共生社会構築という政策課題が打ち出される中、住民が地域生活課題を「我が事」ととらえ、地域で課題解決に主体的に取り組むことができるよう支援するとともに、従来の対象、法律ごとの縦割り対応ではなく子どもからお年寄り、障がい者まで「丸ごと」相談に応じ、課題解決に向けて多機関協働しながら対応する資質を備えたソーシャルワーカー育成を目指す。したがって単なる国家試験受験資格取得のための学びではなく、福祉政策の動向、課題を歴史的な文脈で捉え、その中で問題意識をもちながら考察を深めることを学生には期待している。

3. 方法

社会福祉、地域福祉の価値、理念の理解をベースに、社会経済状況の変化に規定されながら社会福祉・地域福祉政策がどのように変遷して今に至るのか、を理解するために、教材として独自の年表を作成し、学生が理解しやすいよう工夫している。また、知識として覚えるべきことがらも多いが、授業では学生が少しでも具体的に興味関心や問題意識を深めることができるよう、発問を工夫し、考える力を養成するよう努めている。また適宜知識の定着状況について国試の過去問等を利用し確認している。

4. 成果

GPA、授業評価ともに到達度としては問題ないと思うが、学生の学力差により再試験該当者が一定数出現するためその影響がGPAには反映される。一方、授業評価において、特に3年次科目（社会福祉学概論Ⅱ、地域福祉論Ⅱ、ソーシャルワーク演習Ⅴ）について応用力がより求められるからか、学生自身の目標達成、成長実感については課題がある。

5. 改善

科目の目標について繰り返し明示し、理解すべき内容を確認することを心がける。また特に3年次科目についてはそれまでの学びを踏まえた解説、実習を踏まえた解説をより丁寧に行う。一方で、学生の学力差に配慮した授業を工夫する。

6. 教育活動

アドバイザーの学生とはゼミも含めコミュニケーションを十分とりながら時宜にかなった支援を実施している。また地域福祉に興味関心があり、社会福祉協議会を目指す学生には、別に丁寧に相談に応じ、就活支援をしている。

氏名 大場 義貴

職位 教授

1. 教育の責任（科目責任者として担当する科目）

科目名	受講者数	科目名	受講者数
総合演習Ⅱ（社・大場）	5	精神障害リハビリテーション論	13
精神保健福祉演習Ⅱ	13	ライフサイクルとソーシャルワーク	40
社会福祉演習	33	スクールソーシャルワーク実習指導（21SW）	1
スクールソーシャルワーク実習（21SW）	1	総合演習Ⅲ（社・大場）	5
ソーシャルワークの理論と方法（専門）Ⅱ	14	精神保健福祉演習Ⅲ	13

2. 理念

精神保健福祉/公認心理師/SSW の理念・価値・知識・技術等を用いて、精神障害や精神保健上の課題を有する人たちとその家族などに対し、心理・社会的支援を提供し、満たされないニーズに対しては社会資源開発ができる人材を育成し、対象者や家族の QOL の向上を図る。

3. 方法

知識・理論を講義により修得、対象や課題に応じた実践力を実習取得。これらを演習で統合化してしていく。特に、4 年次 8 セメの精神保健ソーシャルワーク演習Ⅲは、学生同士で事例を作成し、進行し、参加し、観察し、更にそれらを評価する、また、自立支援協議会（精神の部）を模擬的に実施し、主体的な学修の場としている。

4. 成果

GPA は 3.0 以上。但し、履修登録後、履修中止や失格等になる学生が複数いる科目は、GPA が下がってしまう。事前・事後学修は定着してきている。

5. 改善

精神保健福祉領域・公認心理師領域の教育は、高度でかつ適否があるため、選考と履修に関しては、学科会議などを通して教員間のコンセンサスを作り、その上で学生にアナウンスをしていく。

6. 教育活動

アドバイザー（2年、3年、4年）、サークル顧問（2ぴいす）。地域アクティブラーニング（不登校まなびの教室への学習動画作成）。

氏名 野田 由佳里

職位 教授

1. 教育の責任（科目責任者として担当する科目）

科目名	受講者数	科目名	受講者数
総合演習Ⅱ（社・野田）	3	高齢者福祉論	47
介護過程Ⅰ	34	介護過程Ⅲ	16
認知症の理解Ⅱ	14	介護総合演習Ⅰ	18
人間関係とコミュニケーション	12	介護過程Ⅰ	12
総合演習Ⅰ（社・野田）	2	総合演習Ⅲ（社・野田）	3
介護過程Ⅱ	19	介護福祉論	16
社会の理解Ⅱ	19	社会の理解Ⅲ	19

2. 理念

隣人愛・・・弱者に寄り添える・・・専門職者として・・・人として・・・尊厳とは・・・社会福祉という個人のリスクを社会全体で支えるとは何か、特にその人らしさを大切にする支援とは何かを伝える教育を目指しています。社会福祉士及び介護福祉士教育において、支えられる経験が支える援助職として醸成されることを望みます。学生に対しては常に笑顔で接したいと心掛けています。優しく、楽しくあることを信条としていますが、生活支援技術などをする際は「命」を取り扱う仕事として厳しい面も必要かと考えています。

3. 方法

学生が主体的に過ごすためには・・・他者の存在を意識し、学習する組織形成を目指せるよう、アクティブラーニングを心がけています。

4. 成果

学生が学ぶために、学生が課題を選ぶことができる、特にレポート課題を早めに提示をし、ルーズリックなども丁寧に説明を行っています。演習は、学生の興味・関心・適性・理解度を意識しながら学習を進めることを意識しています。

5. 改善

新しい授業手法や、資料作成のマイナーチェンジを心がけます。

6. 教育活動

教員としては、学生が心理的安定性のもとで、しっかり学べる環境の設定を心がけています。

氏名 川向 雅弘

職位 教授

1. 教育の責任（科目責任者として担当する科目）

科目名	受講者数	科目名	受講者数
総合演習Ⅱ（社・川向）	4	ソーシャルワーク演習Ⅱ	46
障害者福祉論	51	ジョブコーチ論	9
総合演習Ⅰ（社・川向）	4	総合演習Ⅲ（社・川向）	4
ソーシャルワーク論Ⅲ	50	ソーシャルワーク論Ⅳ	47
社会福祉原論	49		

2. 理念

社会福祉の価値と倫理を事象の中で学生が具体的にイメージできる授業展開

3. 方法

社会福祉課題を掘り下げて解説、その問題の所在に学生が気づけるような講義方法を工夫している。また、現実にある社会問題を社会福祉の視点でいかにして読み解くのかを授業の随所で展開した。

4. 成果

学生が深く考えるような学習機会になっている。

5. 改善

講義に難解な内容が含まれ、どうしても理解が追い付かない学生がいる。難解な問題をいかにして理解しやすく説明するか、その工夫が課題である。

6. 教育活動

春学期3年生アドバイザー、秋学期3年生ゼミ生指導、通年4年生ゼミ生指導。

氏名 福田 俊子

職位 教授

1. 教育の責任（科目責任者として担当する科目）

科目名	受講者数	科目名	受講者数
ボランティア論	151	福祉実習Ⅰ（SW）	2
福祉実習Ⅰ（SW）	1	福祉実習Ⅱ（SW）	2
総合演習Ⅱ（社・福田）	2	ソーシャルワーク総論Ⅰ	59
ソーシャルワーク論Ⅱ	47	ソーシャルワーク演習Ⅳ	45
ソーシャルワーク演習Ⅵ	47	臨床原論	49
福祉実習Ⅰ（SW）	4	総合演習Ⅰ（社・福田）	5
総合演習Ⅲ（社・福田）	2	ソーシャルワーク総論Ⅱ	58
ソーシャルワーク論Ⅰ	58	インターンシップⅠ（SW）	32
インターンシップⅠ実習指導	32		

2. 理念

(1) 授業で大切にしていること

国家試験に合格するために必要とされる知識だけでは、「他者の痛み」を感受しながら寄り添う支援をすることはできません。「講義・演習科目」では、多様な「人の生の営み」と出会うことで、学生自身が、他者や自身の生活や人生を考えつづける姿勢を養うことができる授業づくりを目指している。「実習科目」では、自分の無力感を抱くことの多い学生に対して、なるべく自分の強みに着目できるようにサポートすることを心がけている。

(2) 学生に対して思うこと

自分にはさまざまな「可能性」があることに気づき、広い視野で事象を捉えていける人になることを願っています。

3. 方法

従来担当してきた授業科目は昨年度とほぼ同様の方法で展開した一方で、今年度より新たに担当することになった授業科目については学生の理解度などを確認しながら、授業計画に修正を加えながら進めた。

授業形態別に重視している授業方法等は以下のとおりである。

(1) 授業方法

1) 講義：学生が「考えること」と「覚えること」を楽しみながら無理なくできることを重視した授業を展開した。

2) 演習：学生が、グループとしてのまとまりを意識しながら課題を達成できるよう授業を展開した。

3) 実習：「インターンシップⅠ」では、社会福祉士実習の準備実習としての機能を果たせるよう配属実習及び事前・事後学習を展開した。

(2)授業・教材の工夫

1) 講義：学生が事前・事後学習に取り組みやすいよう、各授業で使用するレジメすべてをまとめた冊子を初回授業に配布した。

実践や理論史を理解する上で、社会背景を知ることが重要であることから、関連する動画などを積極的に活用した。

2) 演習：学生に各回の達成課題を明確に伝え、各グループが課題へ取り組んだ成果を積極的にフィードバックした。

3) 実習：コロナが落ち着きを見せてきたことから、「インターンシップⅠ」では実習日数を増加し10日間とした。

4. 成果

(1)授業評価等の結果をふまえた考察

昨年度と同様、授業評価が概ね肯定的な評価であったことから、授業方法等の基本的な方向性に誤りはなかったと認識している。

今年度初めて担当した授業科目についても、学生のリアクションペーパーからはポジティブな感想が多かったことから大きな問題はなかったと思われる。

しかしながら「ソーシャルワーク総論Ⅱ」の授業評価結果をみると、授業の目標を達成をしたか問う設問の回答が、「そう思う」よりも「ややそう思う」割合が高かったことから、改善の余地があることがわかった。

(2)授業の工夫による学生の態度の変化

昨年と同様、講義習科目については、はっきりとした変化として掴めることは多くないものの、レジメ全てを冊子にしたことやリアクションペーパーを積極的に活用したグループディスカッションをなるべく多く取り入れたことは、学生からは視野が広がったといった肯定的な評価が得られた。

演習科目でも、リアクションペーパーの内容から、グループを活性化するためのフィードバックを積極的に実施したことにより、グループの凝集性を高めることができた。その一方で、ソーシャルワーク演習Ⅲで担当している「災害ソーシャルワーク」については、学生の学習進度に合わないプログラムが一部あったため、今後は改善する必要がある。

実習科目である「インターンシップⅠ」については、実習日数を増加させたことで、学生の実習体験に深まりが見られた。

5. 改善

今年度より新たに担当することになった授業科目については、学生が知識の修得を確認できる機会を事前事後学習で取り組めるよう工夫するとともに、「災害ソーシャルワーク」については、外部講師との事前打ち合わせを綿密に行うことで教材の活用等を改善する。

6. 教育活動

(1)アドバイザー

3・4年生を担当している。最低、年に2回の面談を実施している。親とは異なる大人の立場を活かして、学生の悩みなどを聴くように心がけている。

(2)部活動

フットサルサークル、ボランティアサークルの顧問をしている。

(3)その他

病気や障がいある兄弟姉妹をもつ「きょうだい」を支援する事業にかかわっている。

氏名 佐々木 正和

職位 教授

1. 教育の責任（科目責任者として担当する科目）

科目名	受講者数	科目名	受講者数
ソーシャルワークの理論と方法（専門）Ⅰ	27	総合演習Ⅲ（社・佐々木）	7
精神保健福祉実習指導Ⅱ	13	精神保健福祉の原理Ⅰ	39
精神保健福祉実習	13	精神保健福祉の原理Ⅱ	30
社会福祉概論	166	精神保健福祉演習Ⅰ	14
総合演習Ⅰ（社・佐々木）	4	精神保健福祉実習指導Ⅰ	14
総合演習Ⅱ（社・佐々木）	7		

2. 理念

専門職としての学びを伝えていく

3. 方法

具体的な事例や支援方法について説明していく

4. 成果

実習や現場での仕事の中で気づけていける

5. 改善

学生からの評価を基にさらなる授業改善を行う。

6. 教育活動

様々な教育活動を実践していく。

氏名 落合 克能

職位 准教授

1. 教育の責任（科目責任者として担当する科目）

科目名	受講者数	科目名	受講者数
総合演習Ⅱ（社・落合）	2	ソーシャルワーク実習指導Ⅰ	46
ソーシャルワーク実習指導Ⅱ	46	トップマネジメント論	16
ソーシャルワーク実習Ⅰ	46	ソーシャルワーク実習Ⅱ(2023 年度開講 21SW)	30
ソーシャルワーク実習Ⅱ(2024 年度開講 22SW)	29	ソーシャルワーク実習Ⅱ(2024 年度開講 21SW)	2
ケアマネジメント	12	介護福祉管理論	19
総合演習Ⅰ（社・落合）	5	総合演習Ⅲ（社・落合）	2
ソーシャルワーク演習Ⅲ	45	社会福祉経営論	49
介護福祉管理論	16	社会福祉調査論	47

2. 理念

社会福祉調査や社会福祉経営（福祉サービスのマネジメント）といったいわゆる間接援助技術は、福祉サービス利用者に直接かかわる科目と違い、福祉実践におけるイメージが持ちにくいこともあり、履修者の学習モチベーションが湧きにくい科目です。しかしながら、福祉サービス提供組織に就職後、これらの知識やスキルは、地域の福祉ニーズを把握したり、質の高いサービスを提供するために役立つスキルです。また、国家試験の指定科目でもあるため、授業を通して基礎的な力をつけてもらうことは重要なことだと考えています。

3. 方法

両科目とも、実際の国家試験の問題を解く機会を設けて、授業内容との関連性がイメージしやすいようにしています。また、当該科目を学ぶことを意義を伝えるよう心がけています。社会調査論では、映像を用いて実際の調査をイメージしやすくしたり、分析手法を演習形式で体験してもらるようにします。また、社会福祉経営論では聖隷福祉事業団のトップマネジャーの方々に実践内容をご講義いただくことにより、より実践的なイメージをもってもらえるようにしています。

4. 成果

社会福祉調査論、社会福祉経営論ともに、4年になって受験する社会福祉士国試対策の模試、本試験で良好な成績を収めることができます。また、社会福祉経営論に関しては、履修者の皆さんが、聖隷福祉事業団のトップマネジャーの方々のマネジメントに関する実践に感銘を受け、その重要性を認識できるようになっています。

5. 改善

社会福祉経営論では、社会福祉士養成テキストの内容（国が示している教育内容）と実践に関する講義内容とをつなぎ、知識として獲得してもらおうとすると時間数が足りない。2025 年度は、予習・復習の設定を詳細に行うことによってそれを埋められるようにしようと考えています。また、社会福祉調査論に関しては、旧カリキュラムの内容にプラスしてプログラム評価が入ってきたため、やはり時間的に不足することから、映像等を用いた予習・復習ができる仕組みを構築したいと考えています。

6. 教育活動

- ・3-4 年生のアドバイザーを担っています。ゼミ活動では、自身の専門分野に限らず、ゼミ生自身が取り組みたい内容で研究ができるように支援しています。また、3-4 年生の就職支援に関しては、アドバイザー以外の方々の相談等にもできる限り応じています。

- ・社会福祉士の国家試験対策委員を入職依頼 14 年間担当しており、受験生全員が合格できることを目標にサポートの仕組みを構築してきました。2021 年度から 4 年連続で新卒大学生の全国平均を超える合格率となっており、2024 年度は、新卒受験生 40 名以上の大学で東海圏域 2 位の合格率でした。

- ・特別養護老人ホームなど、福祉サービスの質的評価に関する研究に取り組んでおり、大学の授業科目（特に介護福祉管理論）に活かしています。

氏名 泉谷 朋子

職位 准教授

1. 教育の責任（科目責任者として担当する科目）

科目名	受講者数	科目名	受講者数
基礎演習Ⅰ（SW・泉谷）	18	総合演習Ⅱ（社・泉谷）	7
児童・家庭福祉論	79	児童・家庭支援とソーシャルワーク	6
スクール（学校）ソーシャルワーク論	7	基礎演習Ⅱ（SW・泉谷）	18
総合演習Ⅰ（社・泉谷）	6	総合演習Ⅲ（社・泉谷）	7
ソーシャルワーク演習Ⅰ	58	子ども家庭支援論	27
社会的養護Ⅱ	23		

2. 理念

教員は社会福祉実践現場での勤務経験を有す。自身の経験から、就職後、経験を積む中で、大学で学んだことの意味・意義に気づき、習得した知識・技術を活かすまでには時間を要した。そこに至るまで、大学時代に培った調べる力、考える力、人と協働する姿勢は社会人になってとても役に立ったと考えている。大学では学生が主体的に学ばなければ、社会人としての基礎的な力、知識や技術は身につかないと考える。学生が主体的に学ぶことができるよう、また、学生の興味関心を広げるような関わり、指導を心掛けている。

3. 方法

履修生が50名以上の講義科目では、学生が一方向的に講義を受けるのではなく、学生同士で意見交換する時間を設けたり、リアクションペーパーに講義を受けて考えたこと、疑問に感じ調べたことなどを記入するように設定し、学生が学びを深めることができるよう工夫している。正しいか、正しくないかではなく、どうしてそのような状況が起こるのか、その背景に何があるのか考えてもらえるような題材を選ぶようにしている。学生に毎回授業内容の要約を作成させているが、授業時間に自分は何を学んだのか、理解できていないことは何か、フィードバックを通して確認できるよう働きかけている。

履修者が50名以下の科目では、アクティブラーニングを基本とし、演習形式で授業を行っている。テーマ、題材を提供し、学生たちが課題に取り組む、考える、他者の意見を聞き、他者から学ぶ、自分の意見との違いを知ることから学びを深めることができるよう、事前事後学修用の課題を出す等している。

4. 成果

授業で考える時間、意見交換する時間を設けることで、学生たちは学習している内容を自分事としてとらえるようになっていくように感じている。講義形式の授業で取り入れている授業内容の要約作成を通して、学生たちは内容を羅列するのではなく、簡潔にまとめる力がついているように見受けられる。演習形式で実施している授業は、学生の発信力、受信力の向上にもつながり、授業開始時と終了時では学生の学びの姿勢が異なると感じている。演習形式の授業では、学生たちの発想から学ぶことも多く、教える側でありながら学ばせてもらっている。

5. 改善

限られた回数の中で沢山のことをこなさなければならず、一つ一つの学びの振り返りが十分できていないように感じることもある。専門職養成では一つの科目で完結するのではなく、いろいろな科目と連動して専門職としての知識・技術の修得につなげることが必要であるため、他の科目との連動も意識して授業を行うことを心掛けたい。

6. 教育活動

1 年生、編入生のアドバイザーをしている。新しいことばかりの大学生活で不安にならないよう、他の教員や関係部署と連携して学生をサポートしていきたいと考えている。浜松市等がかかわりのある活動で学生が参加可能なものは学生に紹介し、関心のある学生が参加し学び・経験値を広げてほしいと思っている。

氏名 篠崎 良勝

職位 准教授

1. 教育の責任（科目責任者として担当する科目）

科目名	受講者数	科目名	受講者数
地域ケア連携の基礎	375	基礎演習Ⅰ（SW・篠崎）	18
総合演習Ⅱ（社・篠崎）	3	介護福祉実践演習	12
発達と老化Ⅰ	18	介護の基本Ⅲ	16
認知症の理解Ⅰ	35	人間の尊厳と自立	19
基礎演習Ⅱ（SW・篠崎）	18	総合演習Ⅰ（社・篠崎）	6
総合演習Ⅲ（社・篠崎）	3	生活支援技術Ⅲ	14
介護過程Ⅳ	16	介護総合演習Ⅱ	18
人間の尊厳と自立	17		

2. 理念

皆さんには、「介護」と「介護福祉」の違いをしっかりと理解し、その違いを自分の言葉で語れる人材になってほしいと考えています。

介護福祉の現場では、何よりも「観察」が大切です。ただ見るだけではなく、その人の背景や小さな変化、言葉にできない思いを感じ取る力が求められます。

授業や実習では、「気づかれない実践」や「気づかせない実践」の大切さを、皆さん自身が体感し、その意味を理解できるよう工夫しています。

そして、それを自分の言葉でしっかりと説明できるようになることを目指しています。

この学びを通じて、皆さんが自信を持って「介護福祉」の専門職として、自律的に、そして主体的に行動できる力を身につけてくれることが、私の願いです。

3. 方法

「介護福祉」は『観察からはじまり、観察で終わる』と言われるほど、「観察」は専門職にとって欠かせない技術です。

ただ何となく見るのではなく、対象者の生活背景やその人の思い、小さな変化までしっかりと感じ取る力が求められます。

そのため授業では、P.E.I.P.モデル（Personal, Environmental, Independent, Physical）という枠組みを使い、対象者の「個人要素」「環境要素」「自立要素」「身体要素」を総合的に捉え、深く観察・分析することを学びます。

授業の3つのステップ

理論的理解

- ・P.E.I.P.モデルの考え方や各要素の意味、相互の関係性について、まずはしっかりと理解します。

実践的応用

- ・模擬事例や実際のケースをもとに観察を行い、その結果を P.E.I.P.モデルに基づいて分析・考察します。

フィードバックと振り返り

- ・観察の結果をグループや教員と共有し、対話を通して新たな気づきを得ながら、自分の観察や分析の精度を高めます。

この学びを通じて、皆さんは「観察」で得た情報をもとに根拠ある支援計画を立て、自律的に介護過程を展開できる力を養います。

授業で学ぶ理論や技術が、現場での自信につながることを願っています。

4. 成果

授業後のリアクションペーパーや振り返りシートから、多くの学生が自分自身の「気づき」を通じて深く学ぶ姿勢を身につけていることがわかりました。

特に、P.E.I.P.モデルを活用した観察と分析の実践では、次のような具体的な成果が確認されています。

(1)観察力の向上

学生は対象者の小さな表情や動き、生活環境の変化に対して、具体的で細やかな気づきを言葉で表現できるようになりました。

身体的要素（Physical）だけでなく、環境要素（Environmental）や心理的要素（Personal）にも視野が広がり、対象者を総合的に理解する力が向上しました。

(2)思考の可視化

観察結果を P.E.I.P.モデルに基づいて整理し、論理的に言語化する力が身につきました。

グループワークでは、学生同士が積極的に意見交換を行い、お互いの気づきを共有し合うことで、新たな発見が生まれるようになりました。

(3)実践への自信

実習前後のアンケートでは、多くの学生が「観察」を活かした支援計画の立案に自信を持つようになったことがわかりました。

特に「気づかれない実践」「気づかせない実践」を意識して行動する姿勢が少しずつ定着しています。

これらの成果は、単なる知識の習得ではなく、学生一人ひとりが「介護福祉」における観察の重要性を理解し、実践に結びつける力を養っていることを示しています。

今後は、これらの成果をさらに深化させるために、より実践的な実習の機会や現場との連携を強化し、学生が自信を持って「介護福祉」の現場に立てるようサポートしていきます。

5. 改善

今年度は、授業や実習での評価をより効果的にするために、以下の4つのポイントに焦点を当てて改善を進めています。

(1)評価基準の明確化

これまでの評価フォーマットでは、学生が自分の観察や支援内容をどの程度適切に振り返り、分析できたかが曖昧な部分がありました。

そこで、P.E.I.P.モデル（Personal, Environmental, Independent, Physical）の各要素ごとに、より

具体的な評価基準を設定し、振り返りのポイントを明確にしました。これにより、学生自身が自分の支援を客観的に振り返ることができるようになります。

(2)フィードバックの充実

これまでは、主に自己評価が中心で、教員や他の学生からのフィードバックが不足していました。今年度は、実習後にフィードバックセッションを設け、教員や学生同士でお互いの観察や支援内容について意見を交わし、多角的な視点から振り返る機会を増やしました。

(3)デジタルツールの活用

紙ベースの評価フォーマットでは、記述が形式的になりやすいという課題がありました。そのため、デジタルツールを導入し、リアルタイムで評価やコメントを記録できるシステムを検討しています。これにより、支援実践直後にフィードバックを受けることで、学生一人ひとりの振り返りの精度がより高まることを期待しています。

(4)継続的な振り返り機会の確保

評価は一度きりのものではなく、授業や実習の期間中に定期的な振り返りを行うことが大切です。そのため、振り返りの機会を複数回設け、改善点をその場で修正しながら学びを深められるような環境づくりを進めています。

これらの改善を通じて、皆さんがより質の高い「観察」と「評価」を行えるようにサポートし、最終的には自律的に介護過程を展開する力を養うことを目指しています。

6. 教育活動

1年生のアドバイザーとして、学生一人ひとりが安心して学び、成長できる環境づくりを心がけています。

学業面だけでなく、学生生活における悩みや不安にも寄り添い、個々の目標達成をサポートしています。

また、地域貢献活動にも積極的に取り組んでおり、以下のような研修を通して、社会に貢献できる介護福祉専門職の育成に努めています。

ハラスメント防止に関する研修：人間関係やコミュニケーションにおいて、互いの尊厳を守り合える関係性を築くための学びを提供。

介護過程の学びに関する現任者研修：現場で働く介護職員に対し、介護過程の理論と実践のつながりを深める研修を実施。

人権に関する研修：介護福祉の現場における人権意識を高め、すべての人が尊厳を保ちながら生活できる支援の在り方を考える機会を提供。

これらの活動を通じて、学生の皆さんが「介護福祉」の専門職として、自律的に行動し、地域社会に貢献できる力を身につけられるよう努めています。

氏名 井川 淳史

職位 准教授

1. 教育の責任（科目責任者として担当する科目）

科目名	受講者数	科目名	受講者数
キャリアデザイン（社会福祉学部）	84	総合演習Ⅱ（社・井川）	7
障害の理解	27	介護の基本Ⅰ	16
コミュニケーション技術Ⅰ	48	介護実習Ⅰ（23SW）	14
介護実習Ⅰ	18	介護実習Ⅱ（23SW）	14
介護実習Ⅲ	13	障害の理解	12
総合演習Ⅰ（社・井川）	6	総合演習Ⅲ（社・井川）	7
コミュニケーション技術Ⅱ	18	介護の基本Ⅱ	16
介護総合演習Ⅳ	13	介護実習Ⅱ	18

2. 理念

福祉専門職等に就くための必要な知識、理論、技術、倫理観を習得することを理念として、講義や演習、実習教育を展開している。大学生は、18歳～22歳という年代的にペタゴジー（幼少期からの学び方）からアンドラゴジー（大人にとって必要な学び方）への変遷過程の渦中にあると考えている。したがって、人としても成長していく時期であり、学修したいこと（自らの課題）を見つける、もしくは自分を知ること（自己覚知）ができるような能動的学修が求められると考えている。そのため、私が教育で大切にしていることは、ティーチングだけでなく、コーチングによる学修も必要であり、学生自身が思考し動機づけができるような環境整備（土台作り）を行うという点である。私自身は声量が大きいため、教室内の空気を占領せず学生の積極的な参加を目的に、学生一人一人に声を掛けていくことをモットーとしている。

3. 方法

授業方法は、はじめに単元で習得すべき目標を明確にし、事前事後課題と80分講義の重要性を明示する。実際に、スライドおよびレジュメを利用し、時には画像や動画等も用いてリアリティによる視覚的理解を促している。また、講義では単元に合わせたテーマを授業の最初に設定し、最近の話題（新聞記事、ニュース、書籍紹介）を提供し、学生自身の考えや意見を発表もしくは記述による方法で伝える機会を設けている。演習では、講義で学んできた内容についてテーマ設定し、知識や理論等が連結するよう、学びの定着を目的とした学修の質的担保を図っている。

4. 成果

講義による画像や動画視聴、および演習時における活動的取り組みは、学生にとって学修の習熟度が向上しているとみられ、GPA および授業評価にも表れている。しかし、実習のように体験的学びによって、自ら思考し学生の能動的学習の動機づけとなっているのか、まだ明確に繋がっているとは

言い切れない状況である。

5. 改善

講義科目によっては、ティーチングが占める傾向にあり、発問もクローズドクエスチョンが中心となることもある。したがって、できるだけオープンクエスチョンとして意見や考え、感じたことを発言する機会を設定していく必要がある。つまり、教員から学生への一方通行ではなく、能動的な学修意欲がもてる双方向の講義に心がけていきたいと考えている。実習教育については、特に事後指導において振り返りや体験的に学んだことを、言葉にして発言する機会について実習報告会以外でも設ける様にする。

6. 教育活動

今年度は、3年次生6名、4年次生7名の計13名のアドバイザー（ゼミ生）を担当し、面談およびゼミ活動を通して、主に学修面や学生生活、進路相談等のサポートを実施。担当科目（学年、履修者数）は、キャリアデザイン（3年、84名）、介護の基本Ⅰ（1年、16名）、介護の基本Ⅱ（1年、16名）、コミュニケーション技術Ⅰ（1年、48名）、コミュニケーション技術Ⅱ（2年他、18名）、障害の理解（3年、27名、専門学校1年12名）、介護総合演習Ⅳ（2年他、13名）を担当した。介護実習Ⅰ、Ⅱ、Ⅲについては、科目責任者として（介護福祉コース1年18名、2年13名）を担当し、コース教員全員との協働連携のもと進めてきた。

氏名 鈴木 文子

職位 准教授

1. 教育の責任（科目責任者として担当する科目）

科目名	受講者数	科目名	受講者数
基礎演習Ⅰ（SW・鈴木文）	19	健康・医療心理学	19
基礎演習Ⅱ（SW・鈴木文）	19	発達心理学	78
総合演習Ⅰ（社・鈴木文）	1	子ども家庭支援の心理学	36

2. 理念

公認心理師養成に向けて、幅広い観点から対象者と向き合うことのできる人材を育成する。保健医療、福祉、教育、司法、産業の各領域において、個々の対象者への支援だけでなく、組織や社会に働きかけることの重要性を理解し、心理学的な手法を用いて個人や集団の健康の維持増進に貢献できることを目標とする。そのために、基礎的な知識の獲得にとどまらず、多職種との連携やチームアプローチに必要な柔軟な思考と行動力を育てる教育を行う。

3. 方法

心理学の基礎科目では、基礎知識を獲得するために講義や事例検討等を行う。

専門科目では、より具体的な事例に関するグループディスカッションや、対象者への介入プログラム作成等を行い、対象者の理解や支援技術の獲得を目指す。

実習・演習科目では、実際の対象者を想定したロールプレイングや支援技法の練習を行い、実践的な技術の獲得を目指す。

4. 成果

就任1年目で担当科目が多くはないが、基礎科目のGPAは高い傾向にあり、学生の理解に沿った内容であると考えられる。

専門科目では、GPAは低めであるが、授業評価における学生への伝わりやすさや授業への動機づけは、ある程度高い水準が得られたと言える。

5. 改善

学生が授業を通して達成感や成長を感じることができるよう、課題や授業内活動へのフィードバックを丁寧に行い、学生が自身の活動に対する結果を理解し、さらなる学修につなげられるようにす

る必要がある。

また、学生の理解度をより高めるために、問題解決、反転授業等のアクティブラーニングを積極的に活用する。

6. 教育活動

公認心理師養成課程の完成に向けて、科目の開設、設備等の環境整備、実習の調整等を行っている。
大学院公認心理師養成課程の開設に向けて、科目の設置や実習の調整等を行っている。

サークル活動に対しては、おりーぶの輪の顧問を務めている。

氏名 仲 義之
職位 准教授

1. 教育の責任（科目責任者として担当する科目）

科目名	受講者数	科目名	受講者数
キリスト教概論（春）	185	キリスト教倫理（春）	6
キリスト教概論（秋）	187	キリスト教倫理（秋）	6

2. 理念

建学の精神である「生命の尊厳と隣人愛」について、聖書を中心としたキリスト教の理解を考えることによって、より深く、また広く人々にその精神の精髓を実践し、伝える事ができる人格を育む。キリスト教が保持してきた「イエス・キリストに示された神の愛」を聖隷の先人たちがいかに受け止め、また実践してきたかについて、多角的・複合的な理解を培う。それらを持って、対人援助の職務において、隣人を愛する事の知識と内面性を養う。

3. 方法

聖書やキリスト教神学、あるいは聖隷の歴史関連のものを軸としながら、テーマごとにおける適切な『文献』を提示し、その『著者』の思いに心と考えを向ける姿勢を養う。また授業中に生じた疑問・質問については次回の授業での返答を基本とする。この「問いと答え」の生じるインタラクティブな関係性が授業中に発生され、学生の主体的参加・自分の立ち位置（sitz in leben）や人生観・世界観が特にリアクションペーパー・レポート・テストにて提示される事を重視する。

4. 成果

本学におけるキリスト教の考え方について、「思っていた以上に、私達の日常生活に身近な考え方だった」あるいは、「法律や良心について、自分たちの生き方や社会にもつながっていて興味深かった。」「授業を受けるにつれて面白さを知り、家族にも発信したり、自分で気になった事を調べもした。」といった感想が提出されており、建学の精神である「隣人愛」を軸としながら、宗教の持つ深い示唆について、生活と職業とに反映できる部分を思索し、深める機会となった。

5. 改善

知識内容が歴史的現実と乖離しないよう、常に国内外の政治・宗教・文化・伝統について適宜情報収集をしていく。またキリスト教の歴史における教訓を積極的に提示しつつ、聖隷グループ関連での働きの内実と結び付けることができるように、各施設の責任者や担当者との関係性を密にしていく。

6. 教育活動

キリスト教関連行事の中での対応が基本である。学期期間の水曜日に実施されている礼拝が独特の活動であり、クリスマス等にはキャロリングのような特別な行事も企画・実践している。OHを始めとして、聖隷のキリスト教理解についてを中心に、人生相談やカウンセリングに近い内容も含めて、個別の対応もしている。

氏名 水野 尚美

職位 助教

1. 教育の責任（科目責任者として担当する科目）

科目名	受講者数	科目名	受講者数
生活支援技術Ⅰ	18	介護過程Ⅴ	15
発達と老化Ⅱ	14	こころとからだⅠ	22
こころとからだⅢ	14	介護総合演習Ⅲ	14
医療的ケアⅡ	15	発達と老化Ⅰ	12
総合演習Ⅰ（社・水野）	1	生活支援技術Ⅱ	18
人体の構造と機能及び疾病	61	こころとからだⅡ	20
医療的ケアⅠ	15	医療的ケアⅢ	15

2. 理念

支援の対象者である「ヒト」を理解するための基本的な知識となる、こころやからだのしくみなどを自分自身の身体で体感してもらえるような授業を目指します。

3. 方法

（視聴覚教材の使用）人体の構造や機能を理解しやすい視聴覚教材を活用します。

（ディスカッションの導入）zoom 機能のホワイトボードや、ビンゴゲームのような用紙を活用し、参加学生全体でディスカッションが行えるように工夫します。

個人ワークとグループワークを組み合わせ、アクティブな学習環境の提供を目指します。

4. 成果

人体の構造や機能、疾患などは、専門用語となる語句や意味を記憶してもらう必要があるため、厳しい授業評価の結果となっていますが、国家試験対策には優良な結果に結びついていると思います。

5. 改善

学生の意欲や興味をより引き出せるような工夫を考え、専門用語などの定着も体感をともなった学習方法を検討していきます。

6. 教育活動

3・4年生のアドバイザー

美容専門学校の初任者研修講師